

第 16 回

こんな時代にロシア語のすすめ

「汚れた紙幣はさっさと使う!」

旧ソ連時代の3ルーブル札
は各共和国の言語でも表記
されていた ↓↓

黒田 龍之助

2026 年現在、日本の紙幣は新札と旧札が併用されています。買い物をしてお釣りを貰うときも、ATM から引き出すときも、いろいろ混ざっているの、財布の中は賑やかです。最近になって新札が増えてきたかなという気もするのですが、旧札もまだまだ流通しています。もちろんどちらも同じ価値であり、そこに差はありません。

ところがわたしは旧札を見ると、さっさと使ってしまいたくなるのです。これには理由があります。

はじめてソビエト連邦を訪れた 1985 年に流通していたルーブル紙幣は、日本円などに比べてずいぶん小さいものでした。1、3、5、10、25 ルーブル札などがありましたが、当時は確か 1 ルーブルが 150 円くらいでしたので、それ以上の高額紙幣は使った覚えがありません。

それにしても 3 ルーブル紙幣って面白いですよ。いまでも記念にとってあります。もっとも当時はルーブルの海外持ち出しが禁止されていたから、後に手に入れたものです。

その紙幣には真ん中に大きくロシア語で「3 ルーブル」と表記されているのですが、その右下の枠内に小さな字がたくさん印刷されています。当時の連邦構成共和国の各言語で「3 ルーブル」と表記されているのです。最初の ТРИ КАРБОВАНЦІ はウクライナ語。ルーブルのことをカルボヴァネツ карбованець というらしいことは、ウクライナで発行された書籍の値段表記が крб なので想像がつかしました。ТРЫ РУБЛІ はおそらくベラルーシ語なのでしょう。3 が тры になって不思議な気分。ほかにもキリル文字の表記がいろいろあるけれど、さっぱり分からない。ラテン文字が三種類あるからバルト三国なんだろうけど、はて、どれがどの言語なのか。そもそもまったく知らない二種類の文字は、どっちがグルジア語でどっちがアルメニア語なのか.....。当時のわたしはホテルの部屋で紙幣をしばしばと眺めながら、ソ連の多様性を実感していました。

ただしこのような多言語表記は 1990 年代に入ると消えてしまいます。さらに経済が混乱して高額紙幣が次々と現れ、ソ連からロシアになって新たな紙幣が発行され、そこにまたインフレでゼロがたくさん並ぶようになり、本当に目まぐるしく変わっていきました。かつてのようなワクワクはもうあ



りません。

新しい紙幣が発行されると、古い紙幣はどうなってしまうのでしょうか。日本でしたらばらくは併用できますし、かなり時間が経過しても銀行へ行けば交換してくれます。外国もそうだと信じたいのですが、経済が混乱していたり、政治体制が変換されたりする国では、以前のお金が急に使えなくなることもあります。

ドイツ映画『グッバイ、レーニン』は、東西ドイツ統合直前のベルリンから物語が始まります。精神的に強いショックを受けて 8 か月間昏睡状態にあった母親が、目を覚ましときはベルリンの壁が崩壊して、世の中がすっかり変わっていました。もう一度大きなショックを与えると命の危険があると医者からいわれた息子は、なんとか取り繕うために涙ぐましい努力をします。中でもお母さんが預金のありかをなかなか思い出せず、ようやく見つけたときには交換の期限が過ぎ、紙幣は紙屑になってしまったというエピソードは、見ていて怖くなりました。旧ソ連でも同じようなことがあったと聞いています。おそらく旧札をさっさと使ってしまいたくなる心理は、この辺りに原因がありそうです。

しかしすぐに使いたくなるのは旧札ばかりではありません。折り目が深々と刻まれていたり、汚れていたりする紙幣も、同じようにさっさと使いたくなるのです。

ソ連時代の紙幣は本当にボロボロでした。紙は皺だらけで柔らかく、下手をすればそのまま崩れてしまいそうで、取り扱いには気をつけなければなりません。とはいえ、どんなにボロくとも価値は変わらないのが紙幣というものですよね。ところが、その常識が覆る場面を見てしまったのです。

20 世紀末の話です。飛行機に乗ってみたら席が前のほうでした。当時のエアフロートは前方 4 列ぐらいがファーストクラスで、離着陸時には仕切りのカーテンを閉めますが、高

ということで、いろんな概論・概説書からの断片が少しず

つ集められた本書は、紛れもなく雑多なエッセイ集となった。一定の分野を俯瞰したければ、それぞれの本をお読みください。断片をあちこち覗くのが楽しいと感じられたら、他の著書もあちこち覗いて楽しんでいただければ、それで充分です」。

多分、黒田さんはこれが言いたかったんだな。

ということで、黒田本をたくさん読んでいる人は本書を読めばまた黒田本が読みたくなる。まだ黒田本を読んだことがない人も、本書を読めばさらに別の黒田本が読みたくなる。本書は実にお勧めのベスト・エッセイ集です。

時代に永らえる映画

ソヴェート映画傑作10選



ネーヤ・ゾールカヤ著
扇 千恵 訳
未知谷
A5判 288 頁
定価 5000 円＋税

ソ連・ロシアの映画芸術専門家ネーヤ・ゾールカヤ (1924 年～2006 年) の手になるソヴィエ

ト映画ガイド。著者は、「もっとも重要な時代と芸術的傾向を代表するものとして、ロシア・スクリーンの中から傑出した 10 作品を選んだ」(まえがきより)。

『戦艦ポチョムキン』(セルゲイ・エイゼンシュテイン監督、1925 年)

『第三メシチャンスカヤ通り』(アブラーム・ローム監督、1927 年)

『帽子箱を持った少女』(ボリス・バルネット監督、1927 年)

『チャパーエフ』(ゲオルギー・ワシーリエフ／セルゲイ・ワシーリエフ監督、1934 年)

『マクシムの青年時代』(グリゴリー・コージンツェフ／レオニード・トゥラウベルグ監督、1934 年)

『サーカス』(グリゴリー・アレクサンドロフ監督、1936 年)

『鶴は翔んでゆく』(ミハイル・カラトゾフ監督、1957 年)

『赤いカーリーナ』(ワシーリー・シュクシン監督、1974 年)

『アンドレイ・ルブリョフ』(アンドレイ・タルコフスキー監督、1966 年)

『砂漠の白い太陽』(ウラジーミル・モティーリ監督、1969 年)

これらはソヴィエト映画史に残る名作ばかりだが、紹介はそれにとどまらない。10 作品のほかにもたくさんの作品が取り上げられているし、革命前のロシア映画スターから、1980

年代ペレストロイカ期の作品まで語られる。

かといって、これは作品概要を綴った普通の映画評ではない。名画の数々と同じ時代を生きた著者ならではのエピソード～俳優のちょっとしたしぐさや、観客の反応、作品の一場面などを通じて、読者に「この映画を観たい」という気にさせるような、「映画愛」のこもった映画評なのだ。

著者のあとがき『本州に住む私たちの仲間』と訳者のあとがきを読むと、著者ネーヤ・ゾールカヤと訳者扇千恵のソヴィエト映画を通じた深い交流と友情の上に、本書の出版が実現したことがよくわかる。多くのロシア映画愛好者の皆さんに手に取っていただきたい一書である。

海峡の向こうの隣人たち

稚内市役所からサハリンへ、駐在員の軌跡



三谷 将 著
花伝社
320 頁
定価 2200 円＋税

地理的に日本に一番近い外国は、中国・台湾ではなく、韓国でもなく、ロシアだ。北海道の北端・稚内からサハリン南端

クリリオン岬まで 43 km。国境の町・稚内市の「サハリン課」に配属され、稚内市サハリン事務所の所長を務めた著者による、これは日ロ地域交流の貴重な記録であり体験記である。

稚内市とサハリンのネベリスク市が友好関係を締結したのは 1972 年だが、稚内とサハリンとの地域交流が活発に行われるようになったのは 1991 年のソ連崩壊後のことだった

(91 年コルサコフ市と友好協定、95 年稚内コルサコフ定期航路開設)。稚内市には「サハリン課」という外国の地域名を冠した特別な部署ができ、2022 年に新型コロナとウクライナ戦争によって中断を余儀なくされるまで、約 30 年間にわたってサハリンとの密接な地域交流が続けられた。相互訪問旅行、青少年交流ホームステイ事業、ロシア人研修生受入事業、定期航路の運休・再開をめぐる交渉、地場産業を巻き込んだ貿易・経済交流など、本書に綴られた記録は、国と国との外交や政治交渉だけでは見えてこない生活に根づいた地域間交流の意味を考えさせるレポートとなっている。

なお、2023 年 8 月に稚内市を退職した著者は、「政治の都合に振り回されるのではなく、隣人としての結びつきを大切にしたい」と、「ル・デトロワ」という会社を立ち上げ、現在は個人事業主として、北海道とサハリンとの交流支援事業を継続している。(F)